第6回 いけじま ふくまんじいせき

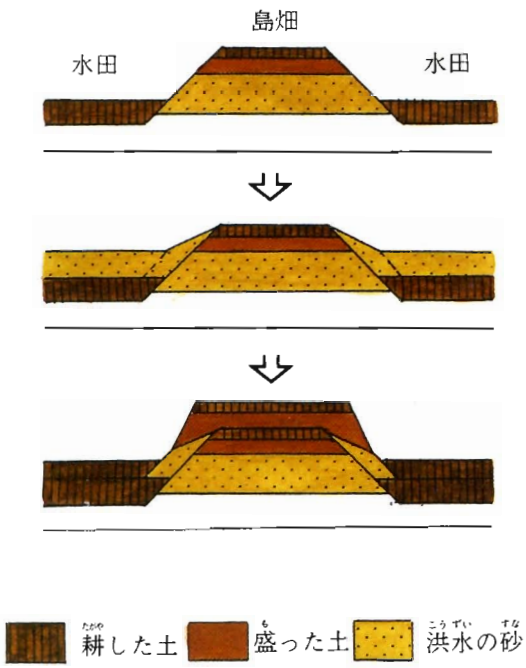
池島・福万寺遺跡　現地説明会

1993. 10. 16.　(財)大阪文化財センター

洪水とのたたかい

下の写真は島畑を切って土層を見たところです。これをわかりやすく説明すると、下の図のようになります。

つまり、洪水の土砂で島畑が埋まると、島畑があった場所に土砂を集めて島畑をつくりなおしているのです。したがって、島畑は同じ位置につくられつづけます。このようなことは、室町時代から江戸時代にかけて何回もくりかえされたことがわかりました。



洪水でたまった土砂を利用して島畑をつくる

洪水で島畑が埋まる

洪水でたまった土砂を、もと島畑があった部分に集めて島畑をつくりなおす

（小山田宏一氏原図）

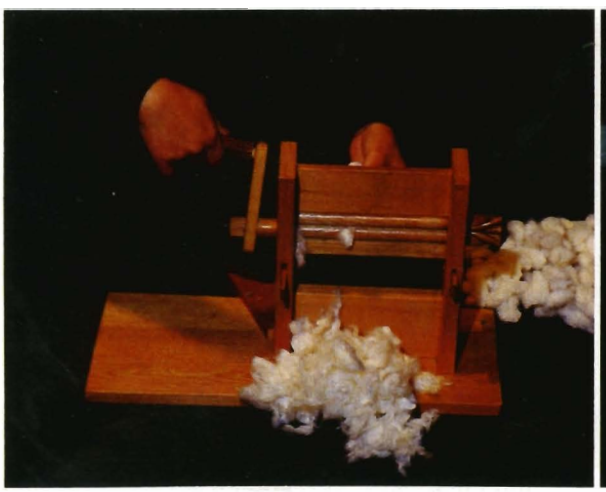
河内木綿と島畑

それでは、島畑ではどのような作物が栽培されたのでしょうか。

江戸時代に大蔵永常という人が『綿圃要務』という本を書きました。これは綿づくりについて書かれた本ですが、その中に島畑のことが「半田」、「搔揚田」という名前で出てきます。それによると、河内では島畑でさかんに綿を栽培していたということです。河内で生産された「河内木綿」は有名ですが、その原料は普通の畑や島畑でとれた綿だったのです。

いまのところ、この遺跡で見つかった島畑で栽培されていた作物をあきらかにすることはできていませんが、江戸時代には綿がつくられていた可能性が高いと思われます。ここでとれた綿は、「綿くり」、「糸つむぎ」などの作業を経て木綿になっていったことでしょう。

綿の成長過程

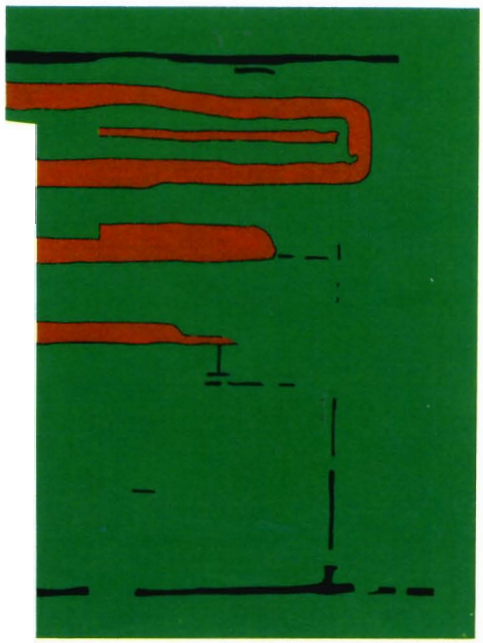


綿くり

糸つむぎ

島畑のうつりかわり

ここでは、調査が終わった十七ノ坪を例にして島畑のうつりかわりをみていきます。



I　江戸時代（300年前ごろ）

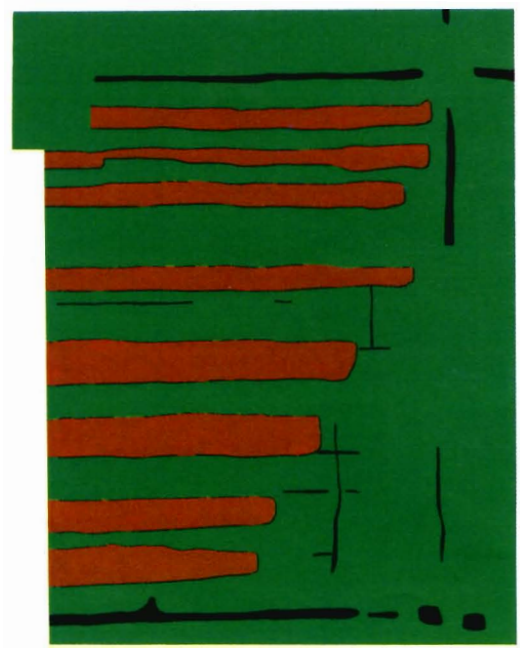
幅が広く高い島畑があります。

形は色々です。

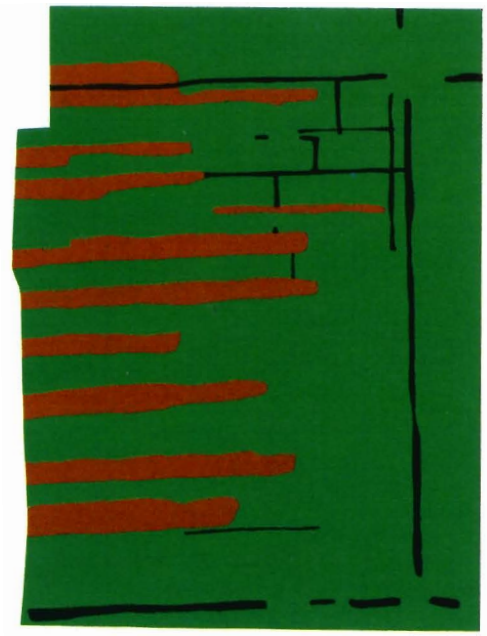
II　戦国時代（500年前ごろ）

幅が広く高い、島畑があります。

島畑の数が多くなってきます。



水田　　島畑　　あぜ

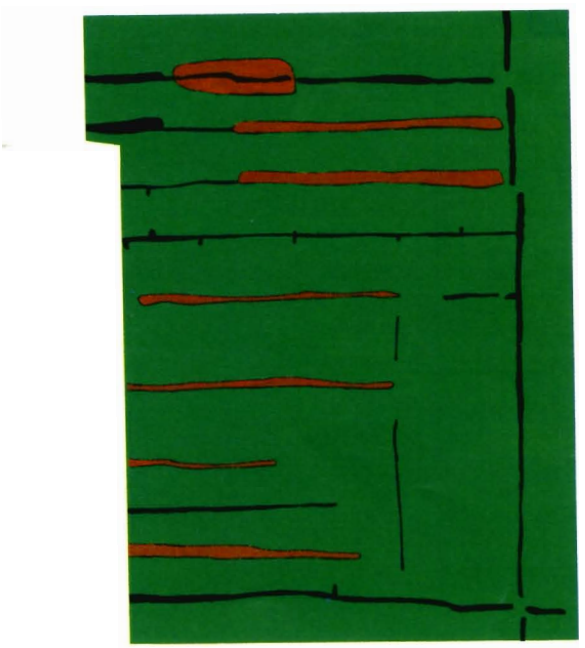


III　室町時代（600年前ごろ）

やや大きめの島畑と、あぜよりも少し大きな島畑がいっしょにでてきます。

Ⅳ　鎌倉時代（800年前ごろ）

高さも低く幅もあぜよりも少し大きいくらいです。



まとめ

島畑は江戸時代の終わりごろから少なくなっていきます。また、綿の栽培もだんだんとおとろえていきました。現在でも島畑は少し残っていますが、今は綿は栽培されていません。

江戸時代の本に出ている絵には、綿を栽培する農民の姿がえがかれています。また、江戸時代に使われていた農具と同じものは、近年まで実際に使われていました。島畑で綿を栽培する農民の姿は、このような絵や農具から想像されていました。しかし、実際の島畑についてはよくわからない点がありました。この遺跡の調査では島畑の構造やうつりかわりをあきらかにすることができました。この成果は、絵や農具などとともに江戸時代の綿づくりの姿を考えるための貴重な資料であるといえます。

室町時代の島畑

今の島畑

農作業の風景（間引き）

肥やしをやる

（『綿圃要務』）
（『広益国産考』）